

『虞美人草』と『羅生門』の雨

Junko Higasa 2013.9.24

夏目漱石が初の新聞小説読者サーヴィスで、東京と京都の膨大な歴史を交互に描いた『虞美人草』に雨が降る。弟子の芥川龍之介がそれを受けて書いた、京都と東京を隔てる平安京の正門であった『羅生門』に雨が降る。その雨は正に戦争による血の雨だろう。

天智天皇～壬申の乱～天武天皇による飛鳥の都の天皇中心の政治～律令国家が整った奈良の平城京～天平文化による寺の建立～貴族と僧の勢力闘争～桓武天皇政治改革のため入京、日本の首都とみなされた京都の平安京～摂関政治による藤原氏の勢力拡大～白河法皇・鳥羽法皇の院政。それから江戸幕府に対する討幕運動～天皇親政体制の転換。明治維新により江戸が東京と改められ、天皇が東京に入り、政府も東京に移行した遷都～それから日露戦争...

「羅生門」の下で、かつて雨の止むのを待っていたのは政府の買上げ品や余剰品を売る市女笠いちめがさや、政府に出仕する無位の官吏である揉烏帽子もみえぼしであった。そして国内疲弊により平安京南部治安が悪化した時に雨の止むのを待っていたのは令外官りょうげのかん（天皇部隊）ではない下人ただ一人であった。下人の語るパロックスは、漱石が『虞美人草』で道義の観念が下ることに対して投じた言であろう。激しい雨がもたらす悲劇。それは一度目の風雨で修復できた「羅生門」を、二度目の嵐で修復できなかった国力を物語る。